

---

# ホンノウ

要徹

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ホンノウ

### 【Nコード】

N8387L

### 【作者名】

要徹

### 【あらすじ】

「君は、人が唯一抗うことのできないものを知っているかい？  
それはね」

蝉が鳴いている。

なんて不愉快な音なのだろうか。

蝉が鳴くという行為は求愛行動、すなわち子孫を残すためと言う。たった一週間という短すぎる期間の中で、奴らが必死に愛を囁く姿が目障りで、必死に鳴く音が耳触りで仕方がない。もっと有意義に過ごせないのだろうか。

奴らが必死に鳴いている間、私はいつも　と言っても、せいぜい三日前からであるが、木に登つてのんびりと過ごしていた。私は純粹に木登りが好きなのだ。木には多くの緑が茂り、心地好い音を奏で、私の心を落ち着けてくれた。暑苦しい奴らとは大違いだ。

しかし、そこでの心の平穩はいとも容易く破壊された。そこにいと、何かを叫びたい衝動に駆られるようになってしまったのだ。

その衝動に駆られたのは、丁度奴らが私の近くで鳴き始めた頃だ。奴らの声を聞いていると、異常なほどに悲しくなり、泣きたくなるのだ。この感情が何なのか、私には皆目見当もつかない。ただ、私はこのままで良いのだろうか、と思ってしまうのだ。奴らでさえ真剣になって生きて、鳴いている中で私は何をしているのだろうか。

私はその衝動に駆られる度に、こいつらと私は違うのだ、私は私だ、と自分に言い聞かせた。奴らの声を聞かないために、その木から離れて、また違う木へと移った。次に私が登った木の上は、ジリジリと太陽が照りつける劣悪な環境だった。

だが、最初のうちは奴らもおらず、太陽が私の身を焼くこと以外は何も不服はなかった。緑の奏でる音が聞けるだけ良かった。だが、しばらくすると奴らがやってきて、必死に鳴き始めるではないか。それは、何度移動を繰り返しても、変わることはなかった。

私は何度も逃げた。あの異常な悲しみから、わけの解らない感情

から逃れるために。私は奴らとは違うのだ。なのに、これは何なのか。いい加減にしてくれ。もう、鳴かないでくれ。もう、愛を囁かないでくれ。私はお前らとは違うのだ。

木をやり続けて、早くも三日が経過した。私が木に登り始めてからで換算すれば丁度六日目のことである。その日、とうとう私は逃げられなくなった。奴らの鳴き声から逃れることは不可能だったのだ。

その日、私は必死にそれを抑えながら体を震わせていた。

そんな時、一匹の蝉が私に語りかけてきた。

「おいおい。あんた、一体どうしたっていうんだ」

「ああ、聞いてくれ。私はお前らの声を聞いていると、何かを叫ばずにはいられなくなる。これは一体どういうことなのだ。私はお前らとは違うのに」

蝉は怪訝な顔をして言う。

「お前は何を言っているんだ」

「え？」

私は体を震わせ、必死に湧き出てくる感情に耐えた。本能だけで生きている奴らとは違うということを証明するために。

しかし、もう体が言うことを聞かない。

私に、限界が訪れる。

そんな私を木の上から見下ろしながら蝉が言う。

「何が俺たちとは違う、だ。お前も、私たちと同じ蝉じゃないか」

その日、私は始めて愛を叫んだ。

（後書き）

睡眠欲、食欲、性欲。

これらは人間の三大欲求だなんて言われていますね。

中でも性欲は子孫を残すために必要不可欠なものです。

どれだけその本能に逆らおうとも、いずれ敗北してしまうでしょう。

「俺とお前とは違うんだ」

と、格好の良い言葉を吐く人がいますが、結局のところ、本質的な箇所では、あなたも、私も何ら変わりはないのです。ヒトという生物で括ってしまうえば、結局私たちは本能に忠実な動物でしかないのです。

そんな世界で、人との違いを強調するのは無意味なのではないかな、と最近よく考えます。

まあ、こいつは本当に人間なのか？ と疑ってしまうほど个性的な人も存在するので、一概に無意味とは言えないかも知れませんね。時には差別化をはかることも重要だと、私は思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8387/>

---

ホンノウ

2010年10月9日07時13分発行